

日本の中小企業、台湾ヘルスケア市場に挑む

～展示会「MEDICAL TAIWAN」出展支援報告～

日本台湾交流協会 貿易経済部 小野 遥太

はじめに

——まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている。

司馬遼太郎の代表作『坂の上の雲』は、こんな一文から始まっている¹。明治維新の動乱の世に奮闘する青年たちを描いた本作の魅力は、何より「世界を見据え、世界に挑む」という登場人物たちの志にある。その挑戦心は今なお日本人や日本企業に受け継がれていると言えるかもしれない。

当協会は、そんな熱き心を持った中小企業の台湾進出を支援している。台湾の組織である台日産業連携推進オフィス（通称TJPO）と連携し、「日台産業協力架け橋プロジェクト」²を実施している。今回はその一環である「国際展示会等出展事業」において台湾の展示会「MEDICAL TAIWAN 2024」への企業出展を支援したところ、その概要をご紹介します。

なぜ台湾のヘルスケア市場では“チャンス”が掴めるのか

読者の皆様は台湾経済と聞いて何を思い浮かべるだろうか。台湾事情に明るい方ならば、半導体やエネルギー分野を真っ先に挙げることだろう。だが昨今はヘルスケア市場も注目を集めている。

当協会が台湾野村総研に委託し実施した調査³によれば、台湾は2025年に超高齢化社会に突入すると予測されており、日本以上に少子化が進んでいる社会でもある。この事実だけ見れば、台湾の将来は悲観的だと思われるかもしれない。しかし台湾の有名バンドであるメイデイ（五月天）の言葉を借りるなら、「たとえ失望しても絶望なんてしない」⁴のも台湾である。台湾が直面する社会課題は、ヘルスケア分野におけるビジネスチャンスとも捉えられている。

本年五月に発足した頼清徳政権は、ヘルスケアを重点政策の一つに挙げた。「プレジジョンヘルスやICT技術のヘルスケア分野への応用、再生医療などの新たなトレンドが注目され、電子機器製造系の大手企業のヘルスケア市場への参入も加速」⁵しており、特にAIやスタートアップ等、台湾の強みを結集したスマートヘルスケア分野は注目を集めている。台湾のヘルスケア市場は拡大の一途を辿っている。

加えて日本と同様、少子高齢化が進む中で数多くの共通する課題を有しているだけでなく、健康保険制度の充実や中小企業の特徴ある技術といった強み等、数多くの点で共通している。日本企業にとっても大いに進出のチャンスがある。

1 本作の舞台となる愛媛県をはじめとする自治体等から、当協会は出向者を受け入れております。同様のご要望がございましたら、ぜひ当協会東京本部までご連絡くださいませ。

2 詳細は当協会HPをご参照ください。
<https://www.koryu.or.jp/business/trade/bridge/index.html>

3 本調査の報告書および概要は当協会HP「委託調査事業」に掲載しております。〈<https://www.koryu.or.jp/business/trade/itakuchosa.html>〉

4 五月天「倔强」の歌詞より引用（小職仮訳）。

5 吉田涼「台湾ヘルスケア市場の動向とヘルスケア市場における日台協業の可能性」（台湾情報誌『交流』2024年5月号）
https://www.koryu.or.jp/publications/magazine/2024/2024_05.html

MEDICAL TAIWAN への出展

その台湾ヘルスケア市場における一大イベントの一つが、MEDICAL TAIWAN（台湾国際医療健康照護展）である。台湾において17年に渡る歴史をもつ展示会であり、医療産業のサプライチェーンに関する全領域を網羅している。今回は特に全世代ケア、医療DX、メディカルサプライチェーンの三大テーマが掲げられていた⁶。

他方、当協会の「日台産業協力架け橋プロジェクト」の使命は、前述のとおり日本の中小企業の台湾進出を支援することである。国際展示会等出展事業と題し、これまで「TAIROS（台湾機器人與智慧自動化展）」や「TAITRONICS（台北國際電子産業科技展）」等への出展を毎年支援していたが、今年度はヘルスケア市場の成長性や日本企業にとってのビジネスチャンスに鑑み、MEDICAL TAIWANへの出展を決定し、ジャパンパビリオンとして8社の展示を支援することとなった⁷（写真1）。

挑戦する企業たち

公募開始後は非常に多くの企業からの応募をいただき、有識者による審査で採択企業を決定した。応募企業の中には、本年4月3日に台湾の花蓮県で発生した地震により大きな被害が出たことを受け、短いプレゼン時間の冒頭を割いてお見舞いと連帯を表明する企業もあり、日台の強い絆が感じられた。結果的に8社を採択し、惜しくも今回は採択できなかった企業も数多いが、どの企業も日台の未来を担う魅力的な製品を発表していたことは特筆しておきたい。

採択された出展企業8社は、商品サンプルの輸送やプレゼン資料の準備など、時には英語も交えながら、着々と準備に取りかかった。「展示に用いるマネキンをいかに調達するか」等、各社ならではのハードルがありつつも、時には当協会と二人三脚になりながら、一つひとつ乗り越えていった。

展示台の配置からそのデザイン、通訳の手配等、ジャパンパビリオンおよびその出展活動にかかる部分は、当協会が細かいところまで一つひとつ検



写真1 MEDICAL TAIWAN 2024における開会直前のジャパンパビリオンの様子（協会職員撮影）

6 台湾貿易センター「イベント情報」

<https://tokyo.taiwantrade.com/event/detail.jsp?id=9544>

7 採択企業8社の詳細は当協会「令和6年度日台産業協力架け橋プロジェクト台湾における国際展示会等出展事業 採用企業の変更について 新着情報 | 公益財団法人日本台湾交流協会」〈<https://www.koryu.or.jp/news/?ItemId=3834&dispmid=5287>〉ご参照。

討のうえ、手作りで準備を進めていった。

準備を進めていくうえで私が思い出したのは、かつて台湾の有名歌手であった張雨生が遺した「僕の未来は夢なんかじゃない、僕の心は希望とともに動くんだ」という歌詞だった。出展企業にとって、台湾に挑戦したい、という夢を初めて抱いたときには想像もつかなかったような地道な作業の連続であったことは想像に難くないが、と同時に「絶対に成功させたい」という希望に満ちた心意気を感じる場面も少なくなかった。

かくして二か月近くに及んだ準備期間はあっという間に過ぎていき、我々は展示会当日を迎えることとなった。

そして、台湾へ

MEDICAL TAIWAN 2024は6月20日から22日の三日間にかけて実施された。開幕式では蕭美琴副総統もあいさつするなど、台湾において非常に重視されているイベントであることがうかがえた（写真2）。

特に今回は当協会として初の出展であり、大いに注目を集めた。日本をイメージした鮮やかな紅白色のブースは来訪者が絶えることがなかった。

来訪者の対応においては、ネイティブの社員を用意した二社を除き、協会が委託した通訳業者が間に入って対応に当たった。一社につき一人以上の担当が付き、入念な準備に基づく深い商品理解のもと、きめ細やかなサポートをしてくださった。

会期中には台湾メディアや5か国のメディアによる取材を受けた⁸ほか、主催である台湾貿易センター（TAITRA）の王熙蒙秘書長にもご訪問いただいた（写真3）。時には台湾ネタ等を交えながら語った日台産業連携の可能性や日台の絆が、一人でも多くの方に届くことを信じてやまない。

加えて台日商務交流協進会⁹（以下、協進会）の協力を得て独自の商談会もセットすることができた。出展企業一社一社の特徴を考慮し、商談を直前までご調整いただいた協進会に、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

かくして充実した三日間は幅広い関係者の協力



写真2 MEDICAL TAIWAN 2024開幕式に出席する蕭美琴副総統（左から4番目）ほか（TAITRA撮影）

8 主に「台湾國際醫療照護展登場!共10國280家企業參與 日本台灣交流協會首度參展 率領8家企業來台 | 非凡財經新聞 | 20240620-YouTube」〈<https://www.youtube.com/watch?v=RjB746nYWa4>〉等。

9 台日商務交流協進会の概要については、鄭世松「台日商務交流協進会のこれまでの歩みと未来の展望について」（台湾情報誌『交流』2023年12月号）参照。
https://www.koryu.or.jp/publications/magazine/2023/2023_12.html



写真3 ジャパンパビリオンを訪問する王熙蒙・TAITRA秘書長（左から2番目、TAITRA撮影）

もあって、無事に終わることができた。出展企業の中には、台湾を代表する複数の大企業から協業を持ちかけられた企業や、具体的な契約締結のために日本語の分かる弁護士の選定に入った企業もあった。

事後に行った企業のアンケートにおいても、巨額の成約が見込まれている企業や、目標としていた代理店の獲得等を具体化させた企業等、各社とも大いに成果が出ていることが見受けられた。具体的には、商談件数199件のうち、61件が成約見込みに至った。

余談だが、今回の成果はビジネスに留まらなかったようである。今回は初めて台湾を訪れた企業の担当者もあり、「ぜひビジネスに限らず家族でも来たい」との声も寄せられた。日台の友情がより広く、より深く、新たな次元に進んでいることは何より喜ばしいことである。

おわりに

さて、冒頭に上げた『坂の上の雲』がドラマ化された際、そのオープニングはこんな一文で締め

くくられていた。

——登っていく坂の上の青い天に、もし一朵（いちだ）の白い雲が輝いているとすれば、それのみを見つめて、坂を登ってゆくであろう。

今回の展示会は出展企業にとって、あくまで大いなる最初の一步に過ぎない。今後彼らは、いよいよ台湾におけるビジネスの拡大に突き進んでいく。

台湾は日本企業には比較的進出しやすい市場とはいえど、それは決して容易な挑戦ではない。有り体に言えば「台湾は親日だからビジネスでも大丈夫」という幻想だけでは生き残れない厳しい競争が待っている。それでも出展企業は今回の展示会を通じ、台湾進出への大きなきっかけを掴めたに違いない。彼らの今後の台湾での成功に期待したい。

当協会は、今後も台湾進出という夢を持った中小企業やスタートアップの台湾進出を支援していく。

（了）